

■論 文

子どもの特性と QOL 及び母親の子育て不安の関連に関する研究 ——「第5回愛知の子ども縦断調査」結果分析より——

山本 理絵
神田 直子

Relations among Elementary School Children's Behavioral Characteristics, their
Health-Related Quality of Life, and Child-rearing Anxiety

Rie YAMAMOTO
Naoko KANDA

キーワード：発達障害，子育て不安，心身の健康

Developmental Disabilities, Child-rearing Anxiety, Health-Related Quality of Life

I. 研究の目的

筆者らは2001年から「愛知の子ども縦断調査」を行い、母親の子育ての状況・子育て不安・支援ニーズと、子どもの個性、家庭の状況、家族・地域・支援機関などのサポート状況などの関連を分析し、とくに子育て困難な条件を明らかにしてきた¹⁾。2001年に主に1歳半から3歳の子どもをもつ親を調査対象として、継続的に調査してきており、これまで、親がとらえる子どもの特徴や障害と育児不安との関連は分析されてきたが、子ども本人がどのように感じているのかはわからなかった。

2009年の第5回継続調査では、その主な対象の子どもが小学校3年生と5年生になったので、「母親調査」に加えて、子どもにも家庭で回答してもらい（「子ども調査」）、母親による子ども認識や子育て不安と子ども自身の回答による自己認識との関連も分析することにした。

「第5回愛知の子ども縦断調査」（「母親調査」）における子育て不安や学校に関する不安、発達障害につながる特徴、親子関係や子どもの学習状況についての親の認知、近隣との関係、学校への要望などについての単純集計及び子どもの学年別集計は、すでに公表している²⁾。また、

「子ども調査」についても、単純集計及び不登校意識とQOL得点（心身の健康度・満足度）や精神的安定との関連について、すでに分析し公表した³⁾。子ども調査分析では、学校へ行きたくないと思うことがあるという「不登校意識」と「父母に話を聞いてもらえる」かどうかは、それぞれ子どものQOL得点と関連しており、「不登校意識群」の中でも、「聞いてもらえる群」のQOL得点は、「聞いてもらえない群」より高くなっていた。また、不登校意識はあまりない「一般群」であっても、「聞いてもらえない群」のQOL得点は「聞いてもらえる群」より低くなっていた。QOLの下位尺度〈自尊感情〉領域得点については、3年生では、「不登校意識群」と「一般群」で有意差はみられなかったが、「聞いてもらえない群」は「聞いてもらえる群」より有意に低かった。

このように、子どもの心身の健康度・満足度には、「父母に話を聞いてもらえる」かどうかと、不登校意識が、関連する要因として重要であることが確認できている。このことをふまえて、本稿では、同一家庭の親の回答と子どもの回答をマッチングして集計することによって、①母親のとらえる子どもの特性（発達障害につながる特徴）と子ども自身の感じているQOL（心身の健康状況や、親子関係、友達関係、学校の成績等）との関連、②子ど

もの不登校に関する意識や父母に話を聞いてもらっていると感じているかどうかと母親の子育て不安との関連を明らかにする。そして、①②を考慮したうえで、③わが子が広汎性発達障害や学習障害のような特徴をもっていると感じている母親の子育て上の不安について検討したい。

発達障害を抱える子どもの友達関係の難しさや自尊心・自己肯定感の低さも指摘されているが、古荘らの「日本版 QOL 尺度」による調査研究では、「軽度発達障害児」の QOL 得点が低いことが報告されている⁴⁾。本調査では母親の目からみた子どもの特徴ではあるが、同様のことがいえるのではないと思われる。この点を確認しつつ、さらにそのことと母親の子育て上の不安との関連について検討する。乳幼児期の子どもの気質や（軽度）発達障害と親の不安との関連に関する研究は、我々の他に水野、根来などの研究があるが、学童期を対象とした調査研究は少ない⁵⁾。また、発達障害と不登校との関連についても、近年、調査・研究がなされるようになってきた⁶⁾。発達障害のような特徴をより強くもっている子どもは、生活・学習や人間関係上の困難から不登校意識をもつ子どもが多いと予想されるが、そのことが親の不安をより強めるのではないかと推測される。このような関連について検討したい。

II. 研究方法

1. 調査対象・方法

本研究の分析対象とするのは、2009年に実施された第5回「愛知の子ども縦断調査」の母親及び子どもの回答である。第1回の調査は2001年に、愛知県内12カ所の保健センターの健康診査（1歳半児健診、3歳児健診）受診者及びフォローアップグループ参加者の親を対象に行った。2001年から5回にわたる調査の概要は、それぞれの調査を分析した論文を参照されたい⁷⁾。

第5回調査は、前回の「愛知の子ども縦断調査」の回答者で子どもが1～3年生である親のうち、継続調査協力に同意し郵送可能であった人579人に、郵送により質問紙を配布した。

母親対象の質問紙とともに子どもが回答する「子ども調査」の質問紙を同封し、「子ども調査」については親の

了承と子ども本人同意により調査用紙に記入してもらい、母親調査用紙と一緒に返送してもらった。郵送にて回答があったのは565人（回答率97.6%、小学校3年生の母親254人、4年生22人、5年生278人）である。そのうち、子ども調査に回答があったのは508人（回答率87.7%）である。調査時期は、2009年2月～3月である。

2. 分析対象、集計・分析方法

本論文で分析対象とするのは、母親の回答と子どもの回答を対応させて分析できるデータ、小学校3年生231人（男114人、女117人）と5年生259人（男113人、女146人）の回答である。調査用紙に記入された回答を、すべて番号・記号で入力し、統計解析ソフトを用いて集計・分析した。

本稿では以下の質問項目について分析対象とする。

〈母親調査〉

① 母親からみた子どもの特徴として、広汎性発達障害（PDD）、学習障害（LD）に関する傾向、子どもの障害の有無。

広汎性発達障害（PDD）、学習障害（LD）に関する質問項目については、2007年実施「第4回愛知の子ども縦断調査」と同様、文部科学省の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」（2002年実施）の質問項目から抽出した。PDDに関する質問項目は2007年第4回調査と同じ9項目を設定し、回答も、文部科学省の評点に合わせて、いいえ—0、多少—1、はい—2とし、点数化した。

LDに関する質問項目については、聴く、話す、読む、書く、計算する、推論する、の6領域各5項目の中から、親が判断することを考慮して2項目ずつ計12項目選んだ。そのさい、文部科学省の調査項目の各領域から1～2項目ずつ選択している高浜市の2005年度版チェック表を参考にした。なお、2007年第4回調査では各領域から1項目ずつ6項目設定した。回答は文部科学省の評点に合わせて、各項目、ない—0、まれにある—1、ときどきある—2、よくある—3とし、点数化した。

② 子育て不安及び学校関連不安に関する質問項目（表1）。回答は「まったくない」から「よくある」の4択式でそれぞれ1点から4点を配点した。

表1 子育て不安項目と学校関連不安項目

子育て不安項目	子育て・子への不安	私には手に負えない子である この子のために色々なことをしても、この子に私の気持ちがほとんど通じていないように思う 子どものことでどうしたらよいか分からなくなることがある この子が将来何か問題を起こすのではないかと子育てに不安になる この子の子育てについて「もっとこうするべき」と周りの人から言われる
	子育て生活満足感	子育てによって自分が成長していると感じられる ★ 自分は子育てに向いていると思う ★ 子どもを育てるのは楽しい ★ 自分は子どもをうまく育てていると思う ★
	疲れと圧迫感	考え事がおっくうで、嫌になるときがある 身体の疲れがとれず、いつも疲れている感じがする 気分転換をするのが上手な方である ★ 一日が充実して、ハツラツとしている ★ 自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう
	マルトリートメント	子どもを、とめどなく叱ったり叩いたりする 子どもをつい叩いてしまうことがある
学校関連不安項目	子ども関連不安	子どもが集団活動に参加できないこと 子どもが友達にいじめられること 子どもに友達ができないこと 子どもが学校に通うのを嫌がること 子どもが学校の勉強についていけないこと 先生にしつけの悪い子と思われること
	親関連不安	授業参観や保護者会に親が出ること 自分自身が他のお母さんと親しくなれること

★は逆転項目

〈子ども調査〉

- ① 24 項目の「日本版 QOL 尺度」について、5 件法（1 ぜんぜんなかった～5 いつもだった）で回答を得た⁷⁾。
- ② 今の学年になって、「学校に行きたくない」と思ったことについて、6 件法（1 ぜんぜんない～6 いつもある）で回答を得た。
- ③ 父母が話をよく聞いてくれるかについて、6 件法（1 ぜんぜんない～6 いつもある）で回答を得た。

質問内容①の QOL 尺度については、開発者の集計方法にならって、各項目の回答に 1 点から 5 点を与えて、全 24 項目の合計点及び下位尺度（領域）ごとの合計点をそれぞれ 0～100 点に換算したものを、QOL 得点、各領域の得点とした。得点が高いほどよりよい状態であることを示している。

3. 倫理的配慮

前回調査の質問項目の最後に次回の調査への協力についても尋ね、了承して住所・氏名を記した人を継続調査対象者とした。調査依頼書に調査の趣旨及び個人情報の保護に関すること、調査責任者等を表記し、親の了解と

子どもの同意が得られた場合、子どもに質問紙に回答してもらったこととした。子どもの質問紙にも個人情報の保護、回答を拒否する自由について、わかりやすい説明を付した。回答データは ID 番号によって管理し匿名化している。

QOL 尺度の使用については、日本版を作成したメンバーである古荘純一氏（青山学院大学）と、原作者である Ravens-Sieberer らには、許可をとってある。

Ⅲ. 分析結果

1. 母親の感じる子どもの特徴と子どもの QOL 得点との関連

- (1) 広汎性発達障害傾向と子どもの QOL 尺度による得点

「母親調査」における広汎性発達障害に関する質問 9 項目の合計得点の平均値は 3 年生 2.01 (SD 2.67)、5 年生 1.96 (SD 2.43) であった（回答の点数分布は、注 2）の文献を参照）。得点が高いほど広汎性発達障害の傾向を強くもっていると感じていることを表している。5 点以上の得点の子ども約 1 割を「PDD 得点高群」とし、そ

れ以外を「一般群」とした。各群の学年ごとの人数と割合は表3のとおりである。なお、「PDD 得点高群」のうち、障害や持病があると回答した人は3年生32.4%、5年生26.8%であった。

「子ども調査」によるQOL得点の平均値は、3年生76.9 (SD 12.0), 5年生73.2 (SD 13.2) であった。QOL得点平均値を、学年別に「PDD 得点高群」と「一般群」とで比較してみた(表4, 表5)。3年生は「自尊心」以外のすべての領域で、5年生はすべての領域で、「PDD 得点高群」は「一般群」よりも有意にQOL得点が低かった。

(2) 学習障害傾向と子どものQOL得点

「母親調査」におけるLDに関する質問12項目の合計得点の平均値は、3年生8.85 (SD 7.83), 5年生9.31 (SD 7.52) である(得点の分布については注2)を参

照)。得点が高いほどLDの傾向を強くもっていると感じていることを表している。20点以上の子ども約1割を「LD 得点高群」とし、それ以外を「一般群」とした。それぞれの学年の人数と割合は表4のとおりである。

「PDD 得点高群」と「LD 得点高群」の重なりをみたのが表5である。3年生では、「PDD 得点高群」の中に「LD 得点高群」の割合は、31.3%、5年生では45.0%であった。

また、「LD 得点高群」のうち、障害や持病があると回答した人は3年生17.9%、5年生24.2%であった。

「子ども調査」によるQOL得点平均値を、学年別に「LD 得点高群」と「一般群」とで比較してみた(表6)。3年生は「情緒的 Well-being」と「学校」の領域で、5年生は「学校」の領域でのみ、「LD 得点高群」は「一般群」よりも有意にQOL得点が低かった。

表2 PDD 得点高群 (%)

	PDD 得点高群	一般群	合計
3年生	35(13.8)	219(86.2)	254(100.0)
5年生	41(14.7)	237(85.3)	278(100.0)
合計	76(14.3)	456(85.7)	532(100.0)

表3 PDD 得点群別 QOL 得点と 6 下位領域得点の平均値

	QOL 得点	身体的健康	情緒的 Well-being	自尊心	家族	友達	学校
3年生	PDD 得点高群 n = 29	67.5	76.8	80.7	44.6	69.8	62.1
	一般群 n = 208	78.4	84.9	90.8	52.6	81.6	77.7
	t 検定 t 値	- 4.784 ***	- 2.556 *	- 3.104 **	- 1.555 n. s.	- 3.637 ***	- 2.693 *
5年生	PDD 得点高群 n = 39	63.7	74.5	80	32.8	64.3	63.9
	一般群 n = 222	75	83.8	89.2	42	80.2	73.6
	t 検定 t 値	- 4.088 ***	- 2.642 *	- 3.422 **	- 2.173 *	- 4.947 ***	- 3.5 **

* : p < .05 ; ** : p < .01 ; *** : p < .001

表4 LD 得点高群 (%)

	LD 得点高群	一般群	合計
3年生	28(11.0)	226(89.0)	254(100.0)
5年生	33(11.9)	244(88.1)	277(100.0)
合計	61(11.5)	470(88.5)	531(100.0)

表5 PDD 得点高群と LD 得点高群の関連

		LD 得点高群			一般群			合 計		
3 年生 ***	PDD 得点高群	10(31.3)	22(68.8)	32(100.0)	202(92.7)	224(89.6)	250(100.0)	202(92.7)	224(89.6)	250(100.0)
	一般群	16(7.3)	202(92.7)	218(100.0)	220(94.0)	242(83.8)	274(100.0)	220(94.0)	242(83.8)	274(100.0)
	合 計	26(10.4)	224(89.6)	250(100.0)	242(83.8)	274(100.0)	274(100.0)	242(83.8)	274(100.0)	274(100.0)
5 年生 ***	PDD 得点高群	18(45.0)	22(55.0)	40(100.0)	220(94.0)	242(83.8)	274(100.0)	220(94.0)	242(83.8)	274(100.0)
	一般群	14(6.0)	220(94.0)	234(100.0)	220(94.0)	242(83.8)	274(100.0)	220(94.0)	242(83.8)	274(100.0)
	合 計	32(11.7)	242(83.8)	274(100.0)	242(83.8)	274(100.0)	274(100.0)	242(83.8)	274(100.0)	274(100.0)

*** : p < .001

表6 LD 得点群別 QOL 得点と 6 下位領域得点の平均値

		QOL 得点	身体的健康	情緒的 Well-being	自尊感情	家 族	友 達	学 校
3 年生	LD 得点高群 n = 25	69.9	80	82.9	42.7	78.8	77.3	57.6
	一般群 n = 211	77.8	84.3	90.0	52.6	80.5	81.5	77.7
	t 検定 t 値	- 3.138 **	- 1.259 n. s.	- 2.72 *	- 1.84 n. s.	- 0.509 n. s.	- 1.136 n. s.	- 5.025 ***
5 年生	LD 得点高群 n = 32	69.8	80.3	84.0	38.8	75.4	74.4	65.8
	一般群 n = 228	73.8	82.5	88.5	41.4	78.2	78.9	72.9
	t 検定 t 値	- 1.578 n. s.	- 0.663 n. s.	- 1.762 n. s.	- 0.555 n. s.	- 0.749 n. s.	- 1.291 n. s.	- 1.98 *

* : p < .05 ; ** : p < .01 ; *** : p < .001

2. 母親が感じる子どもの特徴と「不登校意識」・「聞いてもらえていない意識」

PDD のような特徴をよりもっている母親が感じている場合、子どもの不登校意識や話を聞いてもらえていないという意識は、どのようであろうか。PDD 得点高群、LD 得点高群と「不登校意識群」「聞いてもらえない群」をクロスしてみた。

3 年生では、「PDD 得点高群」には「不登校意識群」の比率がやや高い傾向にあるが、有意差はみられなかった。5 年生では、「PDD 得点高群」には「不登校意識群」の比率が 28.2% であり、「一般群」より有意に高かった (表 7)。「LD 得点高群」には 3 年生、5 年生ともに「不登校意識群」の比率については、有意差はみられなかった (表 8)。

「PDD 得点高群」には、「聞いてもらえない群」が 3 年生 34.5%、5 年生 30.8% あり、「一般群」より有意に高かった (表 9)。「LD 得点高群」については、「聞いてもらえない群」の比率についても、3 年生、5 年生ともに

「一般群」と有意差はなかった (表 10)。

3. 母親が感じる子どもの特徴と親の不安

自分の子どもが広汎性発達障害の傾向や LD の傾向をもっていると感じている母親、子どもに障害等があると回答した母親の子育て・学校関連不安には、どのような傾向がみられるだろうか。子育て不安に関しては「子育て・子への不安」「子育て生活満足」「疲れと圧迫感」「マルチトリートメント」の 4 つの下位尺度ごとに、子育て不安得点の平均値を算出した。また、学校関連不安についても「子ども関連不安」「親関連不安」の下位尺度ごとに不安得点を算出した。どちらも、得点が高いほど不安が高いことを表している。それぞれについて、子どもの特徴との関連を学年別にみてみよう。

(1) PDD 傾向と親の不安

小学校 3 年生においては、「疲れと圧迫感」以外の下位尺度得点において、「PDD 得点高群」は「一般群」より、

表7 PDD 得点高群と不登校意識群の関連

		(%)		
		不登校意識群	一般群	合計
3年生 n. s.	PDD 得点高群	7(24.1)	22(75.9)	29(100.0)
	一般群	24(11.6)	183(88.4)	207(100.0)
	合計	31(13.1)	205(86.9)	236(100.0)
5年生 ***	PDD 得点高群	11(28.2)	28(71.8)	39(100.0)
	一般群	22(9.9)	200(90.1)	222(100.0)
	合計	33(12.6)	228(87.6)	261(100.0)

*** : p < .01

表8 LD 得点高群と不登校意識群との関連

		(%)		
		不登校意識群	一般群	合計
3年生 n. s.	LD 得点高群	2 (8.0)	23(92.0)	25(100.0)
	一般群	30(14.2)	181(85.8)	211(100.0)
	合計	32(13.6)	204(86.4)	236(100.0)
5年生 n. s.	LD 得点高群	5(15.6)	27(84.4)	32(100.0)
	一般群	28(12.3)	200(87.7)	200(100.0)
	合計	33(12.7)	227(87.3)	227(100.0)

表9 PDD 得点群と聞いてもらえない群との関連

		(%)		
		聞いてもらえない群	聞いてもらえる群	合計
3年生 *	PDD 得点高群	10(34.5)	19(65.5)	29(100.0)
	一般群	30(14.6)	176(85.4)	206(100.0)
	合計	40(17.0)	195(83.0)	235(100.0)
5年生 *	PDD 得点高群	12(30.8)	27(69.2)	39(100.0)
	一般群	36(16.3)	183(83.7)	221(100.0)
	合計	48(18.5)	212(81.5)	260(100.0)

* : p < .05

表10 LD 得点高群と聞いてもらえない群との関連

		(%)		
		聞いてもらえない群	聞いてもらえる群	合計
3年生 n. s.	LD 得点高群	6(24.0)	19(76.0)	25(100.0)
	一般群	34(16.2)	176(83.8)	210(100.0)
	合計	40(17.0)	195(83.0)	235(100.0)
5年生 n. s.	LD 得点高群	7(21.9)	25(78.1)	32(100.0)
	一般群	40(17.6)	187(82.4)	227(100.0)
	合計	47(18.1)	212(81.9)	259(100.0)

不安得点が有意に高かった。5年生においては、すべての下位尺度得点において、「PDD 得点高群」は「一般群」より不安得点が高かった。「子ども関連不安」と「親関連不安」は、3年生においても5年生においても、「PDD 得点高群」は「一般群」よりも有意に高かった（表 11, 表 12）。

(2) LD 傾向と親の不安

小学校3年生においても5年生においても、「疲れと

圧迫感」以外の下位尺度得点において、「LD 得点高群」は「一般群」より、不安得点が有意に高かった。3年生においては、「子ども関連不安」得点と「親関連不安」得点が、5年生においては「親関連不安」が、「LD 得点高群」は「一般群」よりも有意に高かった（表 13, 表 14）。

(3) 障害等の有無と親の不安

子どもに障害や持病があると回答したケースを「障害等有群」とし、その他を「一般群」とし、不安得点を比

表 11 PDD 得点群別不安得点の平均値（3年生）

	PDD 得点高群		一般群		t 検定	
	n	平均値	n	平均値	t 値	
子育て・子への不安	35	12.2	217	9.1	6.395	***
子育て生活満足	33	9.3	214	7.9	3.757	***
疲れと圧迫感	34	12.7	218	12.2	1.558	n. s.
マルトリートメント	35	4.8	219	3.9	3.401	**
子育て不安合計得点	33	39.0	211	33.2	5.745	***
子ども関連不安	35	11.3	217	7.7	5.519	***
親関連不安	35	3.6	218	2.7	3.523	**

** : p < .01, *** : p < .001

表 12 PDD 得点群別不安得点の平均値（5年生）

	PDD 得点高群		一般群		t 検定	
	n	平均値	n	平均値	t 値	
子育て・子への不安	40	12.3	233	9.2	6.965	***
子育て生活満足	40	9.7	231	8.2	4.453	***
疲れと圧迫感	41	13.0	236	12.4	2.006	*
マルトリートメント	41	4.7	236	3.6	5.152	***
子育て不安合計得点	39	39.7	228	33.3	7.059	***
子ども関連不安	41	12.3	237	7.9	9.084	***
親関連不安	41	3.8	237	2.8	3.006	***

* : p < .05, *** : p < .001

表 13 LD 得点群別不安得点の平均値（3年生）

	LD 得点高群		一般群		t 検定	
	n	平均値	n	平均値	t 値	
子育て・子への不安	28	11.9	224	9.2	4.914	***
子育て生活満足	27	9.2	214	7.9	2.563	*
疲れと圧迫感	27	12.6	225	12.2	0.879	n. s.
マルトリートメント	28	4.9	226	3.9	2.78	**
子育て不安合計得点	27	38.4	217	33.4	4.362	***
子ども関連不安	27	10.7	224	7.9	3.315	**
親関連不安	27	2.9	225	2.8	0.413	n. s.

* : p < .05, ** : p < .01, *** : p < .001

表 14 LD 得点群別不安得点の平均値（5年生）

	LD 得点高群		一般群		t 検定	
	n	平均値	n	平均値	t 値	
子育て・子への不安	33	11.7	243	9.3	4.668	***
子育て生活満足	32	9.7	237	8.2	3.790	***
疲れと圧迫感	33	12.8	243	12.5	1.028	n. s.
マルトリートメント	33	4.5	243	3.6	3.672	***
子育て不安合計得点	32	38.8	233	33.6	5.055	***
子ども関連不安	33	12.1	244	8.1	6.063	***
親関連不安	33	3.6	244	2.9	2.674	**

** : $p < .01$, *** : $p < .001$

表 15 障害等有群の不安得点の平均値（3年生）

	障害等有群		障害等無群		t 検定	
	n	平均値	n	平均値	t 値	
子育て・子への不安	29	10.6	225	9.4	1.727	*
子育て生活満足	27	8.6	222	8.0	1.517	n. s.
疲れと圧迫感	28	11.9	226	12.3	1.063	n. s.
マルトリートメント	29	4.1	227	4.0	0.310	n. s.
子育て不安合計得点	27	35.0	219	33.8	1.091	n. s.
子ども関連不安	29	9.9	224	8.0	2.461	*
親関連不安	29	3.0	225	2.8	0.895	n. s.

* : $p < .05$

表 16 障害等有群の不安得点の平均値（5年生）

	障害等有群		障害等無群		t 検定	
	n	平均値	n	平均値	t 値	
子育て・子への不安	29	10.6	246	9.5	1.814	n. s.
子育て生活満足	28	8.9	244	8.4	1.170	n. s.
疲れと圧迫感	29	13.0	250	12.4	1.774	n. s.
マルトリートメント	30	4.0	249	3.7	1.169	n. s.
子育て不安合計得点	28	36.6	240	34.0	2.316	*
子ども関連不安	30	10.1	250	8.4	2.912	**
親関連不安	30	3.2	250	3.0	0.732	n. s.

* : $p < .05$, ** : $p < .01$

較してみた。3年生では「子育て不安合計」得点では有意差がみられなかったが、下位尺度の「子育て・子への不安」得点と「子ども関連不安」得点において、「障害等有群」は「一般群」より、不安得点が有意に高かった。5年生では、「子育て不安合計」得点と「子ども関連不安」得点において「障害等有群」は「一般群」よりも有意に高かった（表 15, 表 16）。

4. 子どもの意識と親の不安

(1) 子どもが「話を聞いてもらえる」かどうかと子育て・学校関連不安

お父さんやお母さんが話を聞いてくれるかどうかでは、3年生で 83.2%、5年生で 81.3%は、「とてもよく聞いてくれる」、「わりと聞いてくれる」（「聞いてもらえる群」とする）と答えていた⁸⁾。「ぜんぜん聞いてくれない」、「ほ

とんど聞いてくれない」,「あまり聞いてくれない」「ときどき聞いてくれる」を合わせて「聞いてもらえない群」とする。子どもが親に「自分の話を聞いてもらっていない」と感じている場合,その親の子育て不安は,どのようであろうか。「聞いてもらえない群」と「聞いてもらえる群」の母親の不安得点を比較してみた(表 17, 表 18)。

3年生においては,4つすべての下位尺度得点において,「聞いてもらえない群」の不安得点は,「聞いてもらえる群」よりも有意に高かった。5年生においては,「聞いてもらえない群」と「聞いてもらえる群」の不安得点は,どの下位得点においても,有意差はなかった。「子ども関連不安」と「親関連不安」は,3年生においても5年生においても,「聞いてもらえない群」と「聞いてもらえる群」の有意差はなかった。

(2) 子どもの不登校意識と子育て・学校関連不安

今の学年になって学校へ行きたくないと思ったことがある子どもは,「いつもある」と「ときどきある」を合わせると(「不登校意識群」とする),3年生で13.8%,5年生で12.5%いた⁹⁾。子どもが「不登校意識群」である

場合,その親の子育て不安は,どのようであろうか。「不登校意識群」と「一般群」の母親の不安得点を比較してみた(表 19, 表 20)。

3年生においては,「疲れと圧迫感」の下位尺度得点においてのみ,「不登校意識群」の不安得点が,「一般群」よりも有意に高く,子育て不安合計得点では,有意差がみられなかった。5年生においては,逆に「疲れと圧迫感」以外の下位項目において,「不登校意識群」の不安得点が「一般群」の不安得点より,有意に高かった。「子ども関連不安」と「親関連不安」については,3年生でのみ「不登校意識群」の不安得点が,「一般群」よりも有意に高かった。

IV. 考 察

1. 母親が感じる子どもの特徴と子どもの心身の健康度・生活の満足度との関連

子どもの特徴と QOL 得点の関連については,母親が,自分の子どもは広汎性発達障害にみられるような特徴をよりもっていると感じている場合,その子ども自身も,

表 17 聞いてもらえない群別不安得点の平均値 (3年生)

	聞いてもらえない群		聞いてもらえる群		t 検定	
	n	平均値	n	平均値	t 値	
子育て・子への不安	40	11.0	197	9.1	4.144	***
子育て生活満足	40	8.6	193	7.8	2.328	*
疲れと圧迫感	40	12.6	198	12.3	1.045	*
マルトリートメント	40	4.7	199	3.9	3.481	**
子育て不安合計得点	40	37.0	190	33.2	3.922	***
子ども関連不安	39	8.7	197	7.9	1.722	n. s.
親関連不安	40	2.8	197	2.8	0.134	n. s.

** : p < .01, *** : p < .001

表 18 聞いてもらえない群別不安得点の平均値 (5年生)

	聞いてもらえない群		聞いてもらえる群		t 検定	
	n	平均値	n	平均値	t 値	
子育て・子への不安	48	10.1	210	9.5	1.361	n. s.
子育て生活満足	47	8.6	208	8.4	0.422	n. s.
疲れと圧迫感	49	12.8	213	12.4	1.656	n. s.
マルトリートメント	48	4.0	214	3.7	1.454	n. s.
子育て不安合計得点	45	36.3	206	34.0	1.419	n. s.
子ども関連不安	49	9.3	214	8.4	1.877	n. s.
親関連不安	49	3.0	214	3.0	0.054	n. s.

表 19 不登校意識群別不安得点の平均値（3年生）

	不登校意識群		一般群		t 検定	
	n	平均値	n	平均値	t 値	
子育て・子への不安	33	9.6	205	9.4	0.472	n. s.
子育て生活満足	31	8.2	203	8.0	0.513	n. s.
疲れと圧迫感	33	12.9	206	12.2	2.067	*
マルトリートメント	33	4.2	207	4.0	0.646	n. s.
子育て不安合計得点	31	35.0	200	33.7	1.247	n. s.
子ども関連不安	32	8.9	205	7.9	2.152	*
親関連不安	32	3.2	206	2.8	1.850	n. s.

*: p < .05

表 20 不登校意識群別不安得点の平均値（5年生）

	不登校意識群		一般群		t 検定	
	n	平均値	n	平均値	t 値	
子育て・子への不安	32	11.3	229	9.4	3.716	***
子育て生活満足	32	9.2	226	8.3	2.182	*
疲れと圧迫感	33	12.7	232	12.4	0.971	n. s.
マルトリートメント	33	4.4	231	3.7	2.677	**
子育て不安合計得点	31	37.3	223	33.8	3.224	**
子ども関連不安	33	10.9	232	8.2	3.845	***
親関連不安	33	2.9	232	3.0	-0.359	n. s.

*: p < .05, **: p < .01, ***: p < .001

心身の健康・生活の満足度が低く、家族関係や友達関係においても満足度が低くなっていた。ただし、3年生では「自尊感情」の領域では、PDD 得点高群と一般群との有意差がみられなかった。「自尊感情」は、日本では小学校3年生ころをピークに学年が進むに従って下がっているのではないかとされており¹⁰⁾、本調査でも5年生より3年生の方が高いことが示されている。このようなことから、5年生では、「PDD 得点高群」と「一般群」との自尊感情の得点の差も現れてくると思われる。

また、母親が、自分の子どもは学習障害にみられるような特徴をよりもっていると感じている場合、その子ども自身も、学校領域（主に成績に関する項目）において QOL・満足度が低くなっていた。「LD 得点高群」は、「PDD 得点高群」と違って、他の領域での「一般群」との差はあまりみられず、QOL 総得点においても「PDD 得点高群」よりもやや高かった。PDD 傾向をもつ場合、LD 傾向をもつ場合より、子どもの健康度・満足度の問題が全般的にわたっており、より深刻である。

PDD 傾向と LD 傾向で QOL 得点の一般群との差にこ

のような違いはあるものの、いずれにせよ、母親が子どもの特徴に難しさを感じている場合、子どもも心身の健康度・生活の満足度が低くなっており、親だけの主観的な見方ではなく、子ども自身も困難を抱えていると感じていることや、そのような子どもを育てる親の不安がさらに親子・家族関係に影響を及ぼしていることが考えられる。

2. 子どもの感じる親子関係（話を聞いてもらえるか）と親の不安との関連

子どもが親に「話を聞いてもらえているかどうか」と母親の不安の関連については、3年生においては、「聞いてもらえない群」の子育て不安得点は、4つすべての下位尺度得点において、「聞いてもらえる群」よりも有意に高かったのに対し、5年生においては、「聞いてもらえない群」と「聞いてもらえる群」の子育て不安得点は、どの下位得点においても、有意差はなかった。なお、子どもが「父母に話を聞いてもらえるかどうか」と QOL 尺

度による得点との関連については、3年生では〈身体的健康〉領域以外で、5年生では、QOL 得点及びすべての領域得点において、「聞いてもらえる群」の方が、「聞いてもらえない群」より得点の平均値が有意に高く、話を聞いてもらえている子どもの心身の健康度・生活の満足度は高いことがすでに分析されている¹¹⁾。精神的安定に関する項目についても3年生、5年生ともに、「聞いてもらえる群」の方が「聞いてもらえない群」より有意に得点が高かった¹²⁾。話を聞いてもらえる子どもたちは、精神的にも安定しているといえる。

親との関係では、3年生では、親に話を聞いてもらえないことをなんらかのかたちで表現し、親もそれに気づいており、連動して親の子育て不安も高くなっていると考えられるが、5年生は、親にストレートには話をしなくなってくる時期でもあり、親が子どもの本音を聞いておらず、子どもの不安等に気づかないことも増え、親の意識と子どもの意識にギャップがあるのではないかと考えられる。

3. 子どもの不登校意識と親の不安との関連

子どもの「不登校意識」と親の不安との関連については、3年生においては、「疲れと圧迫感」の得点においてのみ、「不登校意識群」の不安得点が、「一般群」よりも有意に高かった。5年生においては、逆に「疲れと圧迫感」以外の下位尺度得点においてと子育て不安合計得点において、「不登校意識群」が「一般群」より、有意に高かった。

3年生、5年生ともに、前回すでに分析したように、「不登校意識群」には「一般群」に比べて、「聞いてもらえない群」の比率が高く、QOL 得点及びすべての領域得点の平均値が有意に低かった。とくに5年生の〈自尊心〉領域の得点は25.0と低くなっている¹³⁾。学校へ行きたくないことが「いつもある」、「ときどきある」子どもたちの心身の健康度・生活の満足度はよくないということである。また、「不登校意識群」の子どもには、イライラや集中力のなさ、だれかに怒りをぶつきたいと思うなど心身の健康状態がよくない子どもの比率が共通して高く精神的に不安定な様子がみられ、とくに5年生の精神的安定の状態がよくなかった¹⁴⁾。

3年生では、学校へ行きたくないと思うことの多い子どもの場合、子どものイライラなどによって、その母親は疲れていたり子育てに圧迫感を抱いていたりすることが多いが、子育ての不安や育児生活の満足感については他の子どもたちの親とあまり変わらない。5年生の場合は、逆に、学校へ行きたくないと思うことの多い子どもの母親は、「疲れと圧迫感」がないわけではないが、他の子育て不安が高くなりマルトリートメント傾向もややみられる。3年生の「不登校意識群」の QOL 得点より、5年生の「不登校意識群」の QOL 得点の方が低くなっていたように¹⁵⁾、高学年の不登校傾向のある子どもは、低学年よりも子どもの健康度・満足度もより低くなり、母親の精神的な子育て不安を強くしていると考えられる。子どもが友達関係がうまくいかなかったり勉強についていけなかったりして学校に通うのを嫌がるのではないかという「子ども関連不安」も強くなっている。

4. 子どもの特徴と親の不安との関連

3年生においても5年生においても、多少の違いはあったが、「PDD 得点高群」、「LD 得点高群」は「一般群」より、総じて子育て不安得点、学校関連不安得点が高かった。そして「LD 得点高群」の「子育て不安合計」得点の平均値は3年生で38.4、5年生で38.8であるのに対して、「PDD 得点高群」の平均値は3年生39.0、5年生39.7と高くなっている。「障害等有群」は、障害の種類がわからないことと持病があるケースも含まれているので分析することが難しいが、「障害等有群」の不安得点は「一般群」と有意差があるものが少なく、「PDD 得点高群」、「LD 得点高群」の不安得点より低かった。

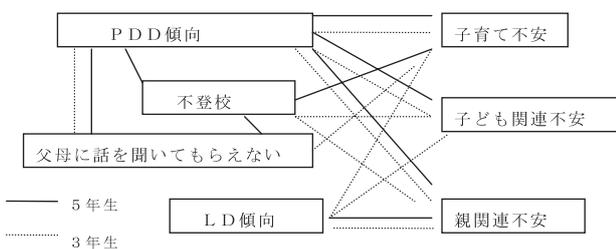
一方で、3年生においても5年生においても、「PDD 得点高群」の中には、「聞いてもらえない群」の比率が高く、「不登校意識群」の比率は、5年生においてのみ有意に高かった。「LD 得点高群」については、そのような有意差がみられなかった。また、「LD 得点高群」に比べて「PDD 得点高群」の方が、QOL 得点がほとんどの領域で低かった。

これまでの「愛知の子ども縦断調査」においても、反応が激しく手がかかったり、落ち着きがなかったりするような特徴をもっている幼児の親の不安は高かった¹⁶⁾。

また、小学校低学年（1年生，3年生）のPDD傾向の高い群の親は，子どもの友達関係や集団活動への参加，登校することや勉強に関する不安が高かった¹⁷⁾。PDD傾向とLD傾向と両方の特徴について，親の不安との関連を分析したのは今回が初めてであるが，とくに「PDD得点高群」の中には，先に述べたように「不登校意識群」や「聞いてもらえない群」の比率が高く，子どもの満足度・健康度が低くなっており，そのことが親の不安にも影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

V. 今後の課題

親が感じる子どもの特徴と子どもの心身の健康度・生活の満足度との関係，子どもの感じる親子関係と親の子育て不安の関係，子どもの不登校意識と子育て不安の関連を考察してきた。各要因間の関連は下図のようになるが，これらの関連は，因果関係を示すものではない。これらの要因がどのように絡み合っているのか，変数間の因果関係等については，さらに共分散構造分析を行って明らかにしていく必要がある。また，今回分析の対象としなかった，親同士の関係やPTAや懇談会などの参加状況，相談相手の有無，地域との関係など，親のもっている社会的なつながりが，子どもの特徴と相俟って親の不安にどのような影響を及ぼしているのかも検討する必要がある，そのような分析については今後の課題としたい。



付 記

本研究は，科学研究費補助金による研究（基盤研究(c)，平成18年度～21年度，課題番号18530760）「幼児期に多動・衝動的傾向を示す子どもの学童期における問題と支援に関する縦断的研究」（代表：神田直子，連携研究者：山本理絵，伊田勝彦，小淵隆司，石野陽子）による研究の一部である。

注

- 1) 神田直子・山本理絵「子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方」『児童教育科論集』第35号 2001年 pp. 21～42，山本理絵・神田直子「子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方(2)―『育児不安』と性別役割分業・母親役割意識の関連を中心に―」『児童教育学科論集』第36号 2003年 pp. 39～54，山本理絵・神田直子「子どもの『育てにくさ』と育児不安・マルトリートメント(2)―4歳児と6歳児を中心に―」『愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編』第53号 2005年 pp. 33～56，神田直子・山本理絵「幼児期から学童期への移行期における親の子育て状況と不安，支援ニーズ―『第4回愛知の子ども縦断調査』結果報告第1報―」『愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編』第56号 2007年 pp. 17～34，小淵隆司・山本理絵・神田直子「広汎性発達障害傾向を持つ子どもの小学校移行期における学校・生活状況と支援ニーズ―『第4回愛知の子ども縦断調査』より―」『愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編』第57号 2009年 pp. 13～35 参照。
- 2) 神田直子・山本理絵「小学生をもつ親の子育て状況・不安と子どもの特性―『第5回愛知の子ども縦断調査』結果第1報―」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第58号 2010年 pp. 1～10 参照。
- 3) 山本理絵「小学生の心身の健康状態に関する調査研究―不登校意識との関連を中心に―」愛知県立大学大学院人間発達学研究科『人間発達学研究』第1号 2010年 pp. 37～52 参照。
- 4) 古荘純一「日本の子どもの自尊心はなぜ低いのか」光文社新書 2009年 pp. 106～110 参照。
- 5) 水野恵里「母子相互作用・子どもの社会化過程における乳幼児の気質」風間書房 2002年，根来あゆみ，山下光，竹田契一「発達障害児の主観的育てにくさ感―母親への質問紙による検討―」『発達』97号 ミネルヴァ書房 2004年 pp. 13～18 参照。
- 6) 文部科学省（不登校問題に関する調査研究協力者会議）「今後の不登校への対応の在り方について（報告）」（2003年），文部科学省「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」（中央教育審議会答申 2005年）において，不登校と発達障害との関連について指摘されている。1980年代後半から不登校と発達障害の関連性を指摘した実態・症例報告がなされるようになり，2000年以降，とくに2000年代後半からは，このような報告が急増している。加茂聡・東條吉邦「発達障害と不登校の関連と支援に関する現状と展望」『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』59号 2010年 pp. 137～160 参照。
- 7) RavensとBullingerらが子どものQOL（Quality of Life）を「子どもの主観的な心身両面からの健康度・生活全体の満足度」と定義し，それをチェックするQOL尺度―Kid-KINDL[®]を開発した（Ravens-Sieberer U. 2003）。これを古庄らは日本語に訳し「日本版QOL尺度」を作成し，活用している。この尺度は，身体的健康，情緒的Well-being，自尊感情，家族，友達，学校の6領域4項目ずつからなり，日常生活面である家庭と学校における心身の健康と適応状態を考慮に入れた包括的かつ簡便な尺度であり，その信頼性・妥当性が確認されている。各項目は，注3）の文献を参考にされたい。
- 8) 山本理絵「小学生の心身の健康状態に関する調査研究―不登

- 校意識との関連を中心に」 p. 39
- 9) 同上論文 p. 41
- 10) 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸「小学生の自己肯定感と人とかかわりとの関連について」(『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第 41 号 2006 年) では, 小学 4 年生から 6 年生までの調査により, 学年が上がるに従って自己肯定感が低下する傾向が示されている。
- 11) 山本理絵「小学生の心身の健康状態に関する調査研究—不登校意識との関連を中心に—」 p. 47
- 12) 同上論文 p. 50
- 13) 同上論文 p. 42
- 14) 同上論文 p. 47
- 15) 同上論文 p. 46
- 16) 山本理絵・神田直子「子どもの『育てにくさ』と育児不安・マルトリートメント(2)—4 歳児と 6 歳児を中心に—」 pp. 33～56
- 17) 小淵隆司・山本理絵・神田直子「広汎性発達障害傾向を持つ子どもの小学校移行期における学校・生活状況と支援ニーズ—『第 4 回愛知の子ども縦断調査』より—」 pp. 19～23